



TIEPh

Transdisciplinary Initiative for Eco-Philosophy

Transdisciplinary Initiative for Eco-Philosophy



TOYO UNIV.

Newsletter No.20 2014. 12

イースト・コースティング(2014年8月20日-24日)

環境デザインユニット：河本 英夫

アメリカ東海岸で感じられるのは、巨大な再生力である。突発的な事件によって、多くの死者が出ても、再生に向けたデザインのなかに組み込んでいくだけの構想力もすごい。「グラウンド・ゼロ」は、まるで現にそこに存在する映画のワンシーンのようでもある。場所の喚起力を最大限活用するように作られている。死を悼む記念碑が、構想を拡大するための祈念となり、贅肉を削ぎ落とした建築物が無数の選択を広げるように設定されている。圧倒的な力強さとソフィストケートされた奥行きを兼ね備えた建造物である。

ハイン・パークは、かつて2階を走っていた貨物鉄道網を、そのまま公園として作り変えたものである。2階を歩道として活用するだけで都市の景観は一変する。たとえば大学の校舎間の移動は、すべて建物の間の2階の歩道になっていけば、風景は変わってしまう。筑波大学と仙台の東北福祉大で一部実現されているが、景観が2階とそこでの歩行という位置から構成されてくる。地面は一般に静止のための場所である。ところが2階は、移動のための場所である。もちろん移動の途中に休む場所も設定されているが、基本的には移動という動作によって、また移動という動作をつうじて成立するように設定されている。この作り変えの構想力は、都市建設に別の選択肢を提示している。静止とは異なる機能性で成立する建築物である。2階は、鳥瞰的な視点や眺望を提供するところではない。見通しが良いわけでもない。なにか宙吊りの感覚に近い。そうした移動の視点を、公園として設計したのである。



ハイン・パーク (New York, Manhattan)



バイオスクリーヴ・ハウス
(New York, East Hampton)

サイエンス・バージェ(平底船)は、多くの教訓をあたえるものとなった。ある意味で、エコと称する企てが、何故貧相になり、多くの者たちを感動させるまで行かないのかの理由を示す教材でもある。海上での生活が可能になれば、人工の島でのタイム・スパンの異なる生活圏を形成することができる。しかしそれは、もっと大きな構想力で作り出されなければならないものである。エコの多くの企画は、どこかミニチュア(玩具)のようになってしまう。それは現在の生活感覚を拡張するのではなく、すでにあるものの一部を切り取りまるで教材のように設置しているからである。

最大の眼目であるアラカワの仕事場と、イーストハンプトンに残された「バイオスクリーヴ・ハウス」を見学した。アラカワの仕事場には晩年の作品が、とても多く残されていて、彼が晩年に何を構想していたかが部分的には良くわかった。クレーやキリコたちが構想した多重性(ポリフォニー)を空

間そのものの多重性にまで拡張しようとしていたことがわかる。だが遺産相続が決着しないために、こうした遺作をいまだ公開できる手順が整わないのである。

4 日目にはボストンに移動して、MIT の研究塔を見学した。ボストンは、アメリカで最も古くからある都市のひとつで、大学と教会を中心にして作られたヨーロッパ風の都市である。人口も 60 万人強であり、市街には日本で言う路面電車が走っている。MIT からは、数十名のノーベル賞科学者が出ている。人材を集めるだけの魅力があるに違いない。一般に建物から創意・工夫まで誘導することは困難である。とすると人材を集めて形成した人的環境が大きく作用していると考えerよりない。

八丈島地熱発電の記

センター長：山田 利明



東京から東南にほぼ 300km、黒潮の本流の中央に八丈島はある。東西にひょうたん形をした島は、西側に八丈富士（西山）と東側に三原山（東山）という二つの山からなり、八丈富士の南の沖 1 km ほどの海中より屹立する急峻な岩山のような八丈小島という島をもつ。

八丈島は火山活動によってできた島である。およそ十数万年前、八丈島は現在の三原山と八丈小島の二島からなる一群の島であった。十万年程前に三原山が噴

火して活発な火山活動を続けたが、数千年前に活動を休止した。今日では、かつて用いられた死火山・休火山・活火山という区分がなくなり、長期間活動していない火山も活火山とみなされるから、八丈島は立派な活火山島といえることができる。実際、八丈富士（標高八五四 m）の頂上は、カルデラを形成し、直径約四〇〇m・深さ六〇m の陥没地となっている。ここから流れ出した熔岩が山を下って海に落ち込み、それがむき出しのまま残されたのが、千畳岩海岸である。ところが地熱の熱源は、新しい八丈富士よりも古い三原山に偏っていて、温泉も三原山側にあり、地熱発電所も三原山の麓にある。もっとも、これは三原山が古い火山で侵食や崩壊も進み、雨水を多く貯えているからとも考えられる。いずれにしても、八丈島に地熱発電所が設けられて、全島需要のほぼ 1/4 をまかなっている事実は、この島の生成に深く関わる。

地熱発電は、マグマによって熱せられた地下水（水蒸気）を用いてタービンを回して発電する方法である。日本の多くの蒸気井は熱水卓越型と称される蒸気と熱水が同時に噴出する井戸であるため、これを蒸気と熱水に分離して蒸気だけを取り出さなければタービンは回せない。そこで気水分離器に通して、蒸気と熱水とを分けて用いる方法を採用している。

発電後の温水の利用法は多岐にわたるが、八丈島では温室の熱源が主要な利用法となる。これは八丈島の集落の形成に問題があり、民家が全島にまばらに散開（八丈富士の西側には民家なし）しており、パイプを通すのにきわめて都合が悪い。したがって発電所の近くに建てた温室の維持、それも冬期のための利用となる。それでも一年中マンゴーやパパイアなどのトロピカルフルーツが実るのは、東京都としては珍しい。欲をいえば、これを産業として起す方法を考えるべきで、東京印、あるいは東電印のバナナやマンゴーなど、それなりのブランド化が図れると思うが……。

実際、民家の軒先に吊るして熟成させていた土産のバナナを食べると、外国産のそれよりも甘味が



強く、香りもよかった。その主婦がいうには、ガスを使わずに自然に一週間ほど蒸らすとこういう味になる、ということであった。

島の西側から北西にかけては、未開の原生林である。温泉は多いが名湯ではない。名だたる名旅館も格調あるホテルもない。太平洋のまっただ中にあるのに、白い砂浜もなければ、リーフもない。第一、砂浜そのものが申し訳程度の広さに熔岩の黒っぽい砂でしかない。つまり流行の観光地にはならない。だからこそ全島にこれだけの自然と風物が残ったといえる。ただ道路だけは立派な国道・都道が走っている。これを除けば、四〇〇年前にこの島に流された浮田秀家の見た景色とさほど変わるまい。これが八丈島の基本的資産である。東京の宝といってよい。



2014 年度 TIEPh 第 1 ユニット研究会

自然観探究ユニット：野村 英登



2014 年 7 月 30 日に東洋大学白山校舎において上記の研究会が実施された。第 1 ユニットでは、ここ数年、東西の伝統的な自然観に関する研究の蓄積を基礎として、その成果を現代社会との結びつきを明らかにすべく、探究をさらに広げて近代日本における自然観の問題を大きなテーマとして扱うようになってきている。それを踏まえて今回は、野村英登（TIEPh 研究支援者）「霊気説からみる自然と身体—佐藤信淵から玉利喜造へ—」、早川芳枝（TIEPh 客員研究員）「中上健次の自然描写と異人（まればと）の表象」、相楽勉（TIEPh 研究員）「初期日本哲学における「自然」の問題」の三つの報告が行われた。

野村報告では、明治から昭和前期の農学者であった玉利を取り上げ、国学、中国思想、南蛮天文学が混淆した江戸後期の佐藤の霊気説を受容しながら、さらに近代の生物学的な知見を取り込み、霊気説を人間の身体内部の機構まで通底させ、明治大正期の治病と修養を兼ね備えた精神療法的実践の理論的基盤を提供したことが論じられた。

早川報告では、「差別が日本の自然の生みだすものであるなら、日本における小説の構造、文化の構造は同時に差別の構造でもあろう」という、「物語と名づけるよりしょうがない」ものとして自然を捉える中上の思考について、『枯木灘』や『地の果て至上の時』といった作品においてどのように展開されているかが論じられた。

相楽報告では、西洋の「哲学」なるものに日本で最初に向き合った人々の思索において、nature としての自然とのかかわりがどのように考えられたかが、西周、井上円了、井上哲次郎、西田幾多郎を事例として、客観的自然「物」の科学的考察と人間の「心」の哲学的探究の関係を軸に論じられた。

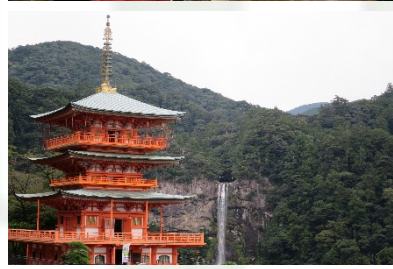
いずれの報告も東洋と西洋、伝統と近代といった二項対立に囚われることなく、エコ・フィロソフィの多元的な様相をテキストにもとづいて堅実に論じようとしている。なお全ての報告は年報での論文化を予定しているが、すでにインターネットで動画公開しており、参考資料と合わせて誰でも視聴が可能である (<http://www.toyo.ac.jp/site/tieph/56587.html>)。視聴者の批正を待ちたい。

熊野古道視察報告

研究助手：岩崎 大

2014年9月19日から21日にかけて、TIEPh 第一ユニット（自然観探究ユニット）と第三ユニット（環境デザインユニット）合同で、紀伊半島にある熊野古道を視察した。古道を歩きながら、熊野三山の熊野那智大社、熊野速玉神社、熊野本宮や、「ゴトビキ岩」と呼ばれる巨大な霊岩のある神倉神社などを参拝した。加えて、和歌山県田辺市にある南方熊楠顕彰館で、「南方熊楠と熊野古道」という特別企画展セミナーに参加した。

日本書紀にも記される自然崇拜の地である熊野古道は、2004年に「紀伊山地の霊場と参詣道」として世界遺産登録を受けているが、神仏習合や神社合祀運動、自然開発など、その歴史は平坦なものではない。熊楠が居住し、研究し、守ろうとした生物多様性に満ちた自然環境は、古道の中に息づいているが、熊楠が求めたのは単なる自然保護ではなく、共生であり、そこには、一歩ごと、一呼吸ごとに感じられる、自然に対する体験的な意識が伴う。熊野には、自然と人間を結びつける体験を、文化として醸成させる環境デザインのヒントが隠れている。田辺市のサステナブル・ツーリズムの試みなど、自然観の気づきを誘発するような活動を今後も期待したい。



事務局からのお知らせ

1. プロジェクトリサーチアシスタント新規加入

2014年11月より、プロジェクトリサーチアシスタントとして竹中久留美氏を事務局にお迎えいたしました。

2. TIEPh ホームページがさらに充実しました

アウトリーチ活動の一環として、研究会の動画と資料を公開いたしました。是非ご参照ください。

ニューズレター20号 平成26年12月発行

編集 東洋大学「エコ・フィロソフィ」学際研究イニシアティブ (TIEPh)

住所：東京都文京区白山5丁目28-20 6号館4F 60458室 Tel&Fax：03-3945-7534

E-mail：ml.tieph-office@toyo.jp Website：http://www.toyo.ac.jp/site/tieph/